仮面をかぶる子どもたち

センター協力研究員（1999年度）（吹田市立山手小学校教諭）　水　原　浩　一

昨年の九月，学校臨床総合教育研究センターで学ぶ機会を与えていただき，私自身にとっては，今までに気づかなかった多くのことを学ぶことができたことを感謝しています。この数年間，高学年の担任として，「いじめ」・不登校問題については無縁ではありませんでした。特に，六年前，自分のクラス内のいじめを認められなかったことは（保護者がいじめの事実をしても認めなかった。）今でも，私の心の中の引っ掛かりとして忘れることができません。

今，学校が抱える諸問題（いじめ・不登校・学級崩壊・校内暴力など）から見られる一般的傾向として，子ども達の人間関係の希薄化がよく言われています。自己中心的で恣意的な人間関係しか作らない。他者への配慮ができない。自己表現をしない。など，現代の子ども達の特性は多くの学校でも見られる傾向ですが，今年受け持っている六年生の子ども達は，二年前，三年前に受け持った子ども達とは少し違う傾向を持っているように感じました。それは，学級集団への帰属意識とルールを守るという規範意識が全くと言っていいほど，欠落している一部の子ども達の存在でした。自分の欲求を充足するためなら，他人に不合理なことを押しつけたり，学校のルールを破っても平気である。この一年間，いくら指導しても通じなかったのです。でも，この一年間，不思議にも，けんかやもめ事がほとんどなく，登校を渋る子どもが誰一人としていませんでした。何度か，「いじめ」や学校生活についてのアンケートなどもしながら，クラスの課題などを全体化しようと試みたが，特にこれといった問題もなく，学校が楽しいと答えた子どもが多かったです。

だからといって，今年のクラスはよかったとはとても思えませんでした。子ども達はお互いに仮面をかぶっているように感じました。学級会で問題提起をしても，誰も発言しませんでした。自分の考えを出さない。本音はみんなの前では出さない。あきらめてしまっている。子ども達は学級集団づくりや人間関係づくりをする意義や意欲すら無くしてしまっているように感じました。

二学期の半ば頃，子ども達をつなぐため，子ども達のことを知るために『今日の私』という取り組みをしました。週に一二度でいいから，自分の身の回りのことで，思ったことや感じたことを自由に書かせました。二月のある授業中，ある子が間違って答えた時，クラス中で息を殺したような何とも嫌な笑いが充満しました。思わず，授業をストップさせて，なぜ，そうしたか？子ども達に問いかけました。いつものように，沈黙が漂い，数分間があっという間にすぎました。仕方なく，何人かの子どもに指名して答えさせました。「先生の話を聞いてなかったから……」「手遊びしていたから……」こんな答えしか返ってきませんでした。情けないことに，たった二人しか，私の本意が分かってくれませんでした。子ども達の間での人間関係や子ども達と自分との間に，どこか回路がつながっていないことを本当に思い知らされました。でも，一人の女の子が次の日の『今日の私』に書いてくれました。

> （前略）先生，話がかわるけど，今日の国語の時な，A君がこたえられない時，ほとんどの人が笑ったやろ。私なりに考えたんやけど，そういう時は心の中で笑って，それでもふきだしそうになったら，声を出さずに笑っていればいいと思ったりしたけど……（中略）あと，先生が授業中に説明している時，みんな下をむいていて「何のこと，私に関係ない」って感じで，少ししゃべり声が聞こえるぐらいで，どんよりした感じがいやじゃなかったですか？私がもし，先生だったらむなしい感じがしますが……，私も下をむいている時が多いけど，時々，先生の方をむくと，むなしく，さびしい感じがします。先生はどう思っていますか？

この女の子は，以前にもA君が友達に暴言を浴びせたり，暴力をふるったと問題視された時，話し合いをしました。みんながA君の行為を批判した中で，唯一A君の言い分に耳を傾けてくれたのが彼女でした。

子ども達が人間関係づくりや学級集団づくりという，学校生活の中でしか獲得できないことに対して疲弊してしまっている今の学校の危機的状況は，教育や学校や学ぶことといった根源的な課題をあぶりだしていると思います。新しく開かれた学校づくりや総合的な学習が混迷する現実に対する一つの有効な手段として注目されていますが，一人一人の子どもがお互いの思いを共感し合い，クラスメイトとして認め合えるような規範意識を形成することこそ，最も重要であるとつくづく思いました。